

第9回京都大学医療技術短期大学部 健康科学集談会抄録

日時：平成10年12月25日(金)

13:00～15:45

場所：北棟1階第2大講義室(口演15分，討論10分)

1. 虚血性心疾患に対する血管新生療法の開発

藤田 正俊
(衛生技術学科)

虚血心筋保護法として revascularization, ischemic preconditioning, transplantation of cardiomyocytes の3つのアプローチが挙げられるが，臨床現場では虚血心筋への血行再建がその治療効果の大きさから重要視されている。PTCA, CABG が血行再建術の中心的役割を果たしているが冠病変が高度に進行した症例では適応とならない。

動脈硬化の結果として動脈に有意な狭窄が生じると灌流域の組織が虚血に陥る。虚血部位への血流を確保しようとする自己防御機構により虚血部位へ向かって血管新生が生じる。血管新生すなわち側副血行血管発達の本態は毛細血管の新生と既存の毛細血管からなる側副血行血管が数層の平滑筋層を有する細小動脈に成熟することに求めることができる。血管新生療法は側副血行血管を発達させる薬物，血管新生因子などを投与することによって虚血組織への血流を再建する新しい治療法と定義しうる。

しかしながら，側副血行血管発達の刺激が何であるかは判明していない。われわれは，側副血行血管発達を刺激する血管新生増殖因子が心筋より遊離・分泌され心嚢液中に高濃度で存在し，心筋虚血に曝された心臓ではその濃度が上昇し血管新生に寄与するとの仮設のもとにいくつかの研究成果を報告した。

冠側副血行路を積極的に発達させる血管新生

療法の1つとしてヘパリン運動療法を提唱してきた。多施設共同試験によりヘパリン運動療法は労作狭心症の側副血行路を発達させ，運動耐容能の改善，狭心痛の軽減につながる事が判明した。血管新生増殖因子投与による冠疾患治療も現実のものとなりつつある。血管新生療法によって患者のQOL，予後が改善することが期待されるので，この治療法の開発，展開には大きな意義が存在する。

2. 足浴が精神神経免疫系に及ぼす影響

豊田久美子，荒川千登世，稲本 俊
(看護学科)

【目的】 この研究の目的は，感覚的看護介入のひとつである足浴が精神神経免疫に及ぼす影響を明らかにすることである。

【方法】 期間は1995年1月～1997年5月で，健康な成人10名と術後の成人患者8名を対象に実施した。方法は山本らが開発したY式足浴法(臥床したまま下腿を湯に浸す温熱及び清潔看護介入)を20分間実施し，その前後の精神面(visual analog scale・faces rating scale)，自律神経系(vital signs)，神経系(β -エンドルフィン・メチオニンエンケファリン)，免疫系(NK細胞活性)の変化を測定した。

【結果】 精神面の変化においては，VAS・FSで，健康な成人・術後患者とも足浴前に比し，足浴直後・20分後とも有意に上昇した。

自律神経系の変化では，健康成人で測定可能だった4例全例において，前腕の皮膚温が足浴